

# 第14回世界そばシンポジュームの旅

江戸ソバリエ・ルシク

寺方蕎麦研究会：小林照男

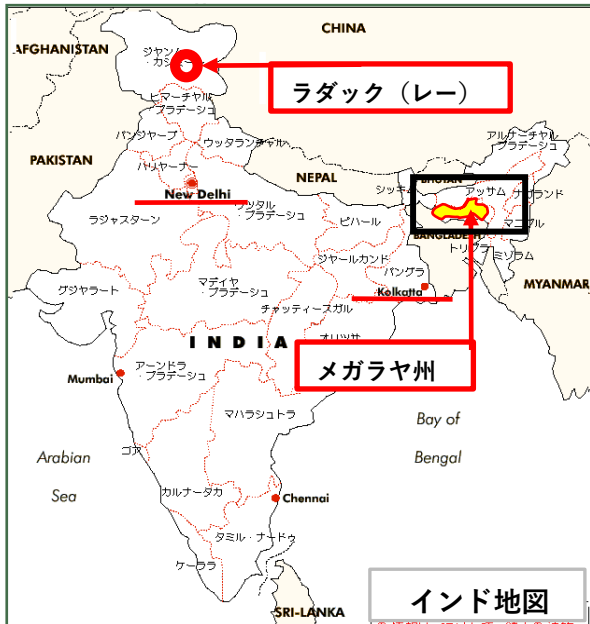
## 1、第14回世界そばシンポジュームが下記で開催されました。

開催地：北東インド・メガラヤ州の州都シロン市内（地図参照）

会場：ノースイースタンヒル大学

開催期間：9月3日～6日（シンポジューム）・

7日～8日（フィールドツアー）希望者のみ。



ゴーハティー空港～シロンの道路は森林地帯を通っています。

\* 参加者：稲澤敏行・砂野 信・佐藤悦子・小林照男（案内/通訳：望月セリナ）

（砂野さんは大西近江先生ご夫妻と一緒に関空から）

\* 行程：日本 ～ ニューデリー又はコルカッタ ～ ゴーハティ空港

～（バスにて）シロン市内（ノースイースタンヒル大学）

ノースイースタンヒル大学は標高1,500mの高地にあります。

\* 参加費：3万円（送迎・会場内の食事やお茶・懇親費用含む）

\* 宿泊代（大学構内ゲストハウス）：5泊6日で約7千円

① 稲澤・佐藤・小林・望月さんの4名は中国からの一行と一緒に迎いのバスで会場（大学構内の各ゲストハウス）に。



ゴーハティー空港にて中国人研究者グループと



シンポジューム公示幕



広大な敷地の大学



大学のゲストハウス。

構内に数棟あり参加者は分散して宿泊した。

\* 構内は広く各ゲストハウス～シンポジウム会場は車で送迎していました。

## 2、シンポジウム日程

- ① (9/2) 相互交換会・歓迎会など
  - ② (9/3) 開会式・全体講演・基調講演
  - ③ (9/4～9/5) 研究発表(講演)
  - ④ (9/6) 研究発表(講演)・閉会式・夕食会
- } 終了後は懇親パーティー

## 3、シンポジウム参加国数 14ヶ国(予定は16ヶ国)、参加者82名。

全体講演3、基調講演3、招待講演12、他講演37、ポスター発表多数。

## 4、9/2の相互交換会での挨拶、9/3の全体講演は共に大西近江先生が最初に行いました。

## 5、9月2日に集合して各国の研究者の交流や自己紹介が行われた中でラダック出身のテンゼン・ノトップ博士(デリー大学教授)が参加していました。

私は3回目のラダック訪問時にラダック自治政府の農業関係議員に「2年後にインド国内でそばシンポジウムが開催される」旨を伝え「ラダックから研究者を参加させる事」をお願いしていたので、ラダックの若き研究者にお会いできた事は本当に嬉しく、願いが叶ったことに安堵しました。



ノトップ博士と



開会式前の交換会光景

## 6、稲澤さん(英語スピーカーは望月セリナさん)の発表(2日目(9/4))

主題：インド・ラダックのソバの古代料理法「手より麺」と伝播

\* 参加者に配布された発表抄録集に稲澤さんの抄録が漏れていて、事務局に何度申し入れても明確な回答がなかったので、心配した大西近江先生が開催責任者に強く申し入れ2日目の発表が確保されました(インドでは良くある事?らしい)。

## 北インド・ラダックのソバ

稲澤敏行

インド西北部ジャンムー・カシミール州ラダックのソバ調査に2015・2016年とそばの食文化調査で訪問した。この地域は1947年パキスタン・イスラム共和国独立時より近年まで他地域との交流が閉鎖され、文化の交流がなく古代のそば文化が残存していると想定し、第1次はレーの町よりインダス川に沿い西北約120Km地区のスクルプチャン村にあるチベット仏教寺院及び農家に泊まり、第2次はレーより北5.800mの峠を越えインド最北端パキスタンとの国境のムスリムの村トルトックの農家に泊まり同様の調査を行った。

両村ともソバ食メニュー・調理道具・製粉法も同一の食文化、これにより先住民族仏教徒より伝承していることが伺われ、さらに道具は4.000年以前の古代石臼研磨、紀元前350年アレキサンドロス帝国時代後ギリシャの影響でヘレニズム文化が興りガンダーラで仏像が作成され、これに伴い中央アジアの粉食文化も移入されギリシャ4.000年前の大理石のフライパンが両地域で使用されているのを発見した。

製麺法としては「手でよる」ヌードル法が仏教と共に中央アジアをラグマンと言う名称でさらに中国・日本へと伝達されたことが推測された。

この調査を期にラダック内両地域にソバの機能性 (functional food) を教示した事によりレーでは郷土食としての機運が高まり、昨年ソバ専門のレストランが開店され、農家での作付け面積も増加し始めたとの報告を受けている。

我々は今年度も5年続けて指導し日・印文化交流が芽生えた事と古典的なヌードルの発祥地の紹介をここに報告する。



稲澤（望月）さんの発表光景

\* 稲澤（望月）さんの発表は写真が多く、また望月さんの聞き易い英語力と、他の植物学発表と趣の異なる麺史の内容だった事などもあって写真を撮る方が多く、終わった時に拍手が凄く大変好評でした。

\* 参加した研究者からのコメント

① 大西近江先生（京都大学名誉教授）

「手より麺」を見つけ出した功績はソバ研究の歴史に残るだろう。

② 鈴木達郎先生（九州沖縄農業研究センター）

私が参加した過去6回の「そばシンポジウム」で最も盛り上がった発表であった。



シンポジウム会場

7、次回（2022年）の開催国は、参加者の投票でポーランドに決まりました。

中国（貴州省）も立候補しましたが（20：40）で敗れました。



大西近江先生ご夫妻と



イワン・クレフト教授を囲んで

8、メガラヤ州は雨季でした。

- ①メガラヤ州は19世紀前半までイギリスの統治下で1987年にアッサム州から分離し、首都をシロンに定めた。

当地は世界有数の降雨量地帯で自然豊かな森林が多く様々な野生動物が生息している、地下資源は良質な珪線石などが採掘され埋蔵量の多い石炭は輸出している。またイギリスの統治下で布教された事もあり住民の大多数がキリスト教徒です。

- ②ゴーハティ空港に着いた時の蒸し暑さには参りました。私は乾燥したラダックから（デリー経由で）標高1.000mのゴーハティに入ったのですが、堪えました。シンポジウム会場のノースイースタン・ヒル大学は標高1.500mにありゴーハティ市内から比べると過ごし易いところでした。

- ③シンポジウム3日目（9/5）、シンポジウムを一休み、珍しい「生きた木の橋」を見学した。降雨量の多い地域住民の知恵で、川の兩岸の「ゴムの木」の根を編んで作られた「洪水に流されない橋」があります（見学料200Rp,写真撮影料100Rp).



兩岸の4本の「ゴムの木」の根で編んでありました。

## \*\* 山間民族村（ガロ族、ビンコナ村）訪問 \*\*

- ①そばシンポジウムの後バングラディッシュ国境近くの山間民族の村を訪れました。シロン市内から車を飛ばして8時間でトゥラ村に、そこからオートリキシャ（3輪車）2台に乗り換えて山道を約5時間掛けて到着、距離の割に時間が掛かります。
- ②米の原産地に近い地域だけに平地は総て米畑ですが最近では栽培放棄地が多くなったとのことでした。

\* 米作の肥料は牛糞だけで、ラダックのような循環型農業ではありません。

\* 代表的な食事は「ジャドー（ご飯の上に肉・野菜を煮込んだ料理を載せたもの）」豚肉・牛肉も食べるので食についてはインド本国と異なり東南アジア系です。

\* 綺麗な水が少なくシャワーの習慣はない様子、竹で編んだ家の中は土間でした。



「竹で編んだ家」の内部



悦ちゃんの編み物教室



食事の準備

- ③ガロ族は18世紀頃には「首切り族」と言われアッサム地方の恐怖だったそうですが、初めての外国人である私達のところに寄って来るなど人懐っこい人でした。
- ④村には立派な教会があり多くの村民がミサに来ていました。ミサが終わった後、神父さんが別室でお茶を出してくれて、村興しなど話好きな神父さんでした。親切にも神父さんの車でバングラディッシュ国境沿いを案内してくれました。



教会



ゴム園



バングラディッシュ国境フェンス

## \*\* そばシンポジウムの前に \*\*

- ①私は「そばシンポジウム」に参加する前にレー市内にあるヒマラヤ歴史遺産研究所で発表（8/31）する「ラダック人自らがラダックの歴史を調査した結果」を得るためにラダックに行く必要がありました。

その事は昨年（2019年）の第4回蕎麦ツアーで同研究所所長のDr・スワン・ワンチョク氏と石臼やラダック史の話をした際に教えてくれたので訪問を約束していた。

\* 結果は、そばシンポジウム発表に必要なラダックの新たな蕎麦畑調査で時間を費やし発表会場に行けず、暗くなってから厚かましく所長宅にお邪魔して調査結果の概要をお聞きし、私がラダック訪問前に調べた内容が正しかった事が確認できましたが、改めて（来年？）同研究所を訪問することにした次第で、そうすることで私の「ラダックの蕎麦探索」が最終的に纏められます。

②ラダックに行くなら・・・と地元（レー）のNPO法人から（第1回蕎麦ツアーで訪れた）スキュルプチャン村で「蕎麦食の様々を教えて」と要請され強行日程で同村を訪れました。

5年前にお世話になった当時の婦人会長や宿泊した家の奥様（村長補佐役になっていた）にもお会いできた事は幸いでした。

スキュルプチャン村は蕎麦栽培が盛んな村、ご婦人方は現金収入を得るために「蕎麦製品」を町（レー）で販売する事を考えているようでしたが・・・。  
（詳細は別の機会に・・・）。



婦人会の方々と



Dr・スワン・アンチョク氏と  
女性は通訳（ジュレーラダック：サキちゃん）

以上